—随筆—

心のなかの栖（すみか）

柏原兵三

高橋健二様

柏原兵三

随筆（ずいひつ） 心（こころ）のなかの栖（すみか）

定価 900円

印　刷　昭和46年9月5日
発　行　昭和46年9月10日
著　者　柏原兵三（かしわばらひょうぞう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
振替東京808　電話(03)260—1111
印刷所　塚田印刷株式会社　　製本所　共同製本
© 1971, Hyozo Kashiwabara, Printed in Japan
乱丁，落丁本はおとりかえいたします。

目次

I

自転車　九
疎開派の「長い道」　一三
私の中の二十五年　二三
習字の思い出など　二七
父の回想　三一
ひげ　四二
死のかりそめの体験　五〇
私の二十代　六〇
酒の肴　六三
白瓜　六六
酒の師　六八
おにぎりの話　六九
屋根裏の部屋　七三
心のふるさと　七五
言葉の微妙さ　七七
自動車　八〇
人間の歩く道　八三
雪国の女　八六

II

時についての
　とりとめのない断想　九一
現代儀式論　九三
自然を拒否した人間の運命　一〇二
学園における知性　一一三
贋学生　一一九
モルモットの嘆き　一二九
天高く病めるアメリカ　一四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

チェコの運命　一五六

Ⅲ

子供と留学の話　一六一
ベルリンの野菜と果物　一六七
ベルリンの魚　一七二
ビールの話　一七八
ドイツの生活あれこれ　一八八
味の領域　一九五
汽車の旅　一九八
ハイデルベルクへの旅　二〇一
即席会話法　二〇五
ホテルの話　二〇八
珈琲の話　二一五

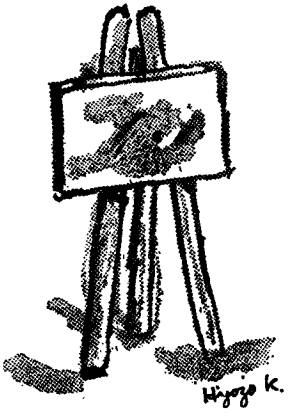
Ⅳ

作品の背景　二二一
芥川賞まで　二二五
ドイツ文学と私　二二六
ヘッセと私　二三〇
ヘッセとヒッピー族　二三八
「伊豆の踊子」のことなど　二四〇
同人雑誌のない国で　二四三
カフカの父のことなど　二四六
断想
―オイレンブルク「日本遠征記」―　二五〇
忘れられぬ本　二五三
幻の本への憧れ　二五五
生みの苦しみ　二五八

記録の保存　二六一
幸福な王子　二六五
現代にとって文学とは何か　二七五
あとがき　二八二

随筆　心のなかの栖

I



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自転車

祖母と母が、私の子供の五歳の誕生日祝に自転車を買ってくれた。一緒に住んでいるので、ふだんから子供にねだられていたらしい。二人は事故を何よりも恐れていて、買う前に、子供に、家の前の道以外には絶対に出ないことを約束させた。

家の前の道は私道で、車が入らない程の狭さでもないが、その道の奥にある家の自家用車以外には、ほとんど自動車が入って来ることはない。たまにクリーニング屋さんの小型の配達車が入って来ることがあるが、この私道が子供たちの絶好の遊び場であることを知っているので、慎重そのもののノロノロ運転をしてくれるから、まず心配がない。嘗ては自動車を楽に入れられないのが、この道の欠点とされていたが、今ではそれがかえって利点となっている。

最初子供は至極満足そうに家の前の小道を、自転車で往き来していたが、そのうちにだんだんと不満を洩らすようになった。大きな道へ出て、町中を乗りまわしたいというのである。

ある土曜日の晩、私は子供に、あしたの朝早く起きて自転車に乗って町中を乗りまわしてみないか、お父さんもついて行くから、といった。子供はすぐその提案に飛びついた。次の朝、私は子供に六時頃起される羽目に陥った。

私は子供の自転車を外へ出すのを手伝いながら、自分が初めて自転車に乗れるようになった時分のことを思い出した。今子供が使っている自転車は子供用の二輪車で、補助車がついているから、難なく乗れる。私が稽古に使った自転車は大人用の古自転車だった。戦争中だったから、子供の自転車などは買ってもらおうにも手に入らない時代だったのである。それは国民学校三年生の時分だった。私は未明に起きて自転車に乗る稽古にいそしんだのだ。

自動車の往来が今とは比較にならない位少なかった頃だけれども、それでも、大人の自転車に子供が乗る稽古を日中するのはかなり危険を伴ったのだ。しかし自動車も自転車も走らず、歩く人も誰一人としていない道路で、自転車に乗る稽古をする気分は格別だった。大分うまく乗れるようになった頃、私は家の近くにある大きな坂へ行って、その坂を自転車で降りてみた。一度その坂を自転車で降りてみたいと長い間心ひそかに願っていたのである。その坂を無事自転車で降り切った時の喜びを久しぶりに私は思い起した。

子供は自分の自転車に補助車がついていることをまだそれ程気にしていない。しかしいずれ、補助車を外して自転車を乗りまわしてみたいと思うようになるだろう。その時になったら、私はこの自分の経験談を話して聞かせようと思った。

朝の町は予想通り静かだったし、車の通りもまったくなかった。空気も東京の真中にしては意外にうまい。私は早くこういう散策を思いつかなかったことを後悔した。子供は喜ぶし、自分にとっても健康にいい筈である。私は肥り過ぎて体重を大幅に減らさなければならない状態にあるから、できることなら毎朝でもこうして子供と共に散歩をしたらいいのかも知れなかった。

子供は楽しそうに自転車のペダルを踏んでいる。自転車の走る速度と、私の歩く速度とはちょうど同じ位である。

「朝の散歩は気持がいいな」と私は思わず口に出していってみた。
「僕も気持がいいな」と子供はいった。
とある曲り角で、私は犬を連れて、ステッキをついて散歩している老人に逢った。この老人と犬には見憶えがあった。夕方よく犬を連れて散歩をしているのに出逢うことがあったからである。この人は朝もこんなに早い時刻に散歩をする習慣があるらしいな、と私は何か発見でもしたように思った。
老人と犬をやり過してしばらくしてから、私の歩く速度と丁度同じ速度で自転車を走らせている子供を見ながら、私は朝早く犬を連れて散歩する気分というのはこういう気分なのかも知れないな、ということを考えた。
ふと私は子供をからかってみたい欲求に駆られた。
「光太郎」と私は子供の名前を呼んでいってみた。
「いい気持だろう」
「うん、とっても」と子供は、明るい、さわやかな声で答えた。
「お父さんも、とってもいい気持だよ」
「そう」と子供はいった。
「まるでな、仔犬を連れて、散歩をしているような気分だよ」
「ふうん」と子供は答えたが、自分を仔犬になぞらえられて、明らかに自尊心を傷つけられた風だった。
子供はしばらく黙っていたが、やがてこういった。
「よくラッシーみたいな犬を引張って自転車で運動させている人がいるでしょう」

「そうだな」
私は子供の反撃を予想できずに答えた。
家の近所にコリー種の犬を飼っている家があった。その家の人がよく、その犬を運動させるために、自転車に紐でつないで連れ出し、町なかを乗りまわすことがあったのである。そのことをいっているのだな、ということは了解できた。
「こうやって、お父さんを連れて、自転車に乗っているとね、ラッシーに運動をさせるために、自転車を走らせているみたいだよ」
「参ったな」と私はいった。
「しかし」と私はいった。「あの自転車はこんなにゆっくり走っていないよ」
「僕だって、もっと速く走れるよ」と子供はいって、急にペダルを速く踏み出した。
自転車は速度を増した。私は大股に歩いたが、そのうちにそれでは追いつかなくなって、とうとう走り出した。子供は一向に自転車の速度をゆるめない。とうとう私は息切れがして来た。
「光太郎、ストップ」と私はいった。
子供は急ブレーキをかけた。私はようやく子供の自転車に追いつくことができた。子供はまたゆっくりとペダルを踏み出した。
「ね、速く走ることができるでしょう」と子供は得意そうに、私の方を見ながらいった。
「そうだな」
「時々今みたいに走らせてみるね」と子供はいった。
「時々にしてくれよ」と私はいった。
自動車が二台猛烈な勢いで角から飛び出して来た。私は朝の道もこの現代の怪物の危険から無

条件にまぬがれてはいないことを思い知らされた気がした。

（43年6月）

疎開派の「長い道」

昭和十五年の四月に私は渋谷区のある尋常小学校に入学した。しかし国民学校令が公布されて、尋常小学校が国民学校に切り換えられ、教育の戦時体制化が行われたのは、次の年の三月だから、小学校一年の末には、学校の名称は尋常小学校から国民学校に変っていたわけである。終戦を迎えたのは国民学校六年の時だったから、卒業した時（疎開から帰ると、私は元の学校に復学した）には再び学校の名称は変っていて、国民学校は小学校となっていた。

こんな風に学校の名称が頻々と変るのは私の世代の運命のようなものだった。旧制中学校に入ってからも、教育制度の改革で旧制中学校は新制高校に昇格したから、その新制高校に進学して卒業するまでに、私は同じ学校に六年いたわけだが、その間にその名前も都立××中学校、都立新制××高等学校併設新制中学校、都立新制××高等学校、都立××高等学校といった具合に四回も変っている始末である。

だからこのあたりの自分の履歴書をもし編年体で書かなければならないとしたら、学校の名称が次から次へと変るのでずいぶん面倒なものとなってしまうだろう。この世に恒常的なものは何もなく、すべてがうつろい易く、うたかたのようなものだという自覚が私の心の底にあるのは、もしかするとこのような事実とも無関係ではあるまい。

私がもの心ついた時、もう日本は中国との戦争を始めていた。謂わば戦争は常態だった。当時のことを思い出すよすがにしようと思って当時のアルバムを取り出して見ると（私の家は焼けてしまったが、弟と二人で父の故郷の富山県に疎開した時に身の周りの品物を持って行ったお蔭で、アルバム類は残っている）、幼稚園で陸軍病院に傷痍軍人を慰問に行った写真が出て来た。それから三越劇場に傷痍軍人を招待して、幼稚園の児童が慰問の演芸を見せている写真などが出て来た。幼稚園の頃の写真はかなりあるが、そのあと戦争中の国民学校時代の写真はクラスで撮った写真が一枚と、弟と二人で疎開する時に家族で写真館へ出かけて撮った写真が一枚と、田舎の国民学校のクラスの級長と町へ出かけて記念に撮った写真の三枚しかない。

今のようにカメラが普及していなかった時代だからスナップ写真がないのは不思議でないとしても、毎年一回クラス全員で撮るのがならわしであった小学校（当時は国民学校といったわけであるが）の写真が一枚しかないのは、だんだん戦争が激しくなって、フィルム類が手に入らなくなり、学年が変るたびに担任の先生とクラス全員で写真を撮るしきたりが中止になったことを物語っている。そんなわけで当時の写真といったらこんなものしかないのだが、しかしこれとても疎開して戦災に免れたからこそあるので、あの時期の写真をまったく持っていないという人々はずいぶん多いに違いない。この間も小学校時代のクラス会があって、六、七人集まったが、そのうち小学校時代の写真を一枚も持っていない者が三人もいた。

ところで弟と二人で疎開する時に家族で撮った写真を見ると、今でも私はある種の感慨を禁じ得ない。それは、こうして家族で写真を撮るのはもしかするとこれが最後かも知れないという気持をめいめいが心の中に抱いて撮られた写真だったからである。いつ戦争が終るか分らなかったし、敵の飛行機が将来本土を頻繁に襲うようになることは予定されたプログラムのようなものだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com